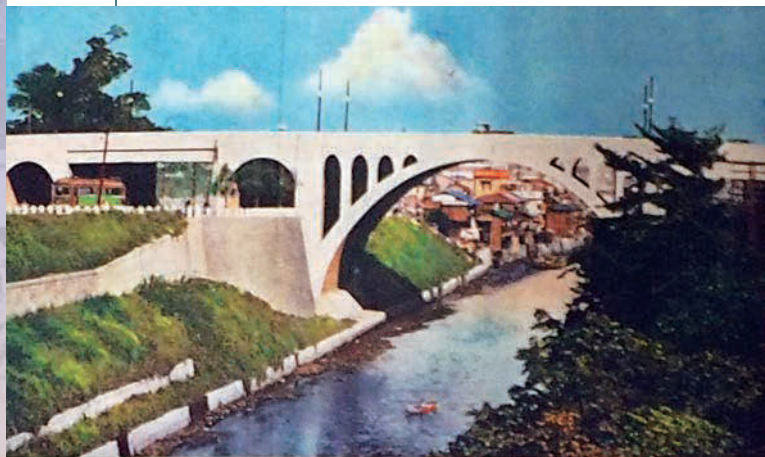


文化財 ニュース

31 Autumn 2023



神田区にあった今川小路
共同建築の外観



復興橋梁 聖橋 (絵はがき)



丸ノ内ビルヂング (絵はがき)

特集

特別展 関東大震災 100年
首都東京の復興ものがたり
—未来へ繋ぐ100年の記憶—

Index

- 1-3 特集
特別展 関東大震災 100年
首都東京の復興ものがたり
—未来へ繋ぐ100年の記憶—
- 4-5 日比谷ミュージアムガイド
令和5年度下半期テーマ展
神田橋門跡石垣発掘調査展
- 6-7 ちよだ歴史文化遺産
日比谷公園開園120周年
—受け継がれる公園の機能—
- 8 文化財事務局通信
こんなこともやっています
～常盤橋屋外ミュージアム～

※掲載資料で特に記載がないものは全て千代田区所蔵

展覧会情報

令和5年
9月1日(金)～11月26日(日)
前期：9月1日(金)～10月15日(日)
後期：10月20日(金)～11月26日(日)
会場：千代田区立日比谷図書文化館 1階
特別展示室
観覧料：無料
開室時間：月～木、土 10時～19時
金 10時～20時 日・祝 10時～17時
休室日：9月18日(月・祝)、10月16日(月)
～19日(木)、11月20日(月)

特別展 関東大震災100年

首都東京の復興ものがたり —未来へ繋ぐ100年の記憶—

2023年は、関東大震災の発生からちょうど100年という節目の年に当たります。ここ千代田区は、震災によって甚大な被害を受けた地域であり、同時にその後の復興事業によって大きな変化を遂げた場所でもあります。

そこで今年度は、関東大震災をテーマにした特別展を開催します。展示では、震災復興を中心に取り上げ、特に“建造物”の視点から東京の復興のあゆみを紹介します。

1923.9.1 関東大震災発生 —そのとき失われた風景と暮らし—

大正12年（1923）9月1日11時58分32秒。地震の規模を示すマグニチュードは 8.1 ± 0.2 、都内の最大震度は7の大地震が、都心部を襲いました。死者の数は10万人を超え、近代日本史上稀にみる大惨事となりました。

「火事と喧嘩は江戸の華」といわれたように、江戸は極めて火事の発生率が高い場所でした。その状態は明治以降も変わらず、明治5年（1872）の銀座の大火など、度々大火事が発生し、都市を焼き払いました。明治政府は都市の不燃化を目指して、新しい制度を作り道路拡幅や耐火建築の導入などを進めました。しかし、予定通りには進まない部分も多く、また神田地域などは、江戸時代以来の木造建築が密集したままでした。

そうした中で発生した関東大震災は、近代以降に新たに作られた町並みも、江戸以来の伝統的な町並みも破壊しました。人びとの日常は失われ、日本の中心都市は突如として大混乱に陥りました。



旧萬世橋駅前の惨状（絵はがき）



上六小学校（現在の九段小学校）の震災当日の日記

当時の小学生が描いた震災スケッチ

区内の小学校資料の中には、震災に関する記録が残されています。それらは、震災に直面した当時の教師や児童の状況を伝える貴重な資料となっています。

震災からの復興 — 変わりゆく都市の姿 —

震災の翌日から、国は早くも復興に向けて動き出します。その中心に立ったのは帝都復興院総裁となった後藤新平でした。後藤は、ただ従来の都市に戻す「復旧」ではなく、この震災をきっかけに震災前からの課題を解決し新しい都市を作っていく「復興」を目指しました。復興院には、都市計画、土木、建築、造園など、様々な分野の優秀な人材が集められ、復興事業がスタートしました。事業の進展に合わせて、都市のインフラ整備や建物の復興も進みます。区画整理によって新たに整備された道路沿いには、最新の技術を兼ね備えた新しい建造物が次々と生まれ、高層ビルが建ち並ぶ新たな東京の都市景観が少しずつ形作られていきました。

今回の展覧会では、新たな都市の景観を構成する、復興小学校、復興橋梁、丸の内内のオフィス街、復興住宅という4つに注目して紹介します。

【前期展示】復興小学校・復興橋梁

【後期展示】丸の内オフィス街・復興住宅



初公開

海老原商店関連資料

海老原商店は、神田須田町二丁目にある復興建築のひとつです。昭和3年(1928)に竣工した、いわゆる「看板建築」の建物で、画家がデザインした店先は特徴的な外観となっています。海老原家には、建物を造った当時の貴重な資料が残っています。

後期
10/20~

震災復興の記憶を未来へ

震災から6年半が経過した昭和5年(1930)3月24日、復興事業の完成を祝して「帝都復興祭」が開催されます。多くの人の努力によって、都市は復興を遂げ、東京は近代的な建築物が建ち並ぶ姿へと変貌しました。

戦災や再開発を経た今、震災復興を伝える建物は姿を消しつつあります。私たちのまちの形成に影響を与えた震災と復興の記憶は、将来に繋いでいくべき大切な歴史のひとつです。(学芸員 山田将之)



前期
9/1~

上六小学校(現九段小学校) 竣工写真 大正15年竣工

東京市の公立小学校は196校のうち117校が焼失しました。鉄筋コンクリート造で再建された学校は、「復興小学校」と言います。耐震耐火構造は勿論のこと、電気、ガスなど当時の近代的設備を兼ね備えた点が特徴でした。現在復興小学校の校舎が現存(一部のみ)している学校は区内ではここだけです。



復興した東京の景観(神田区小川町より駿河台を望む)(絵はがき)

※特別展に関する詳しい情報は
HPをご覧ください。



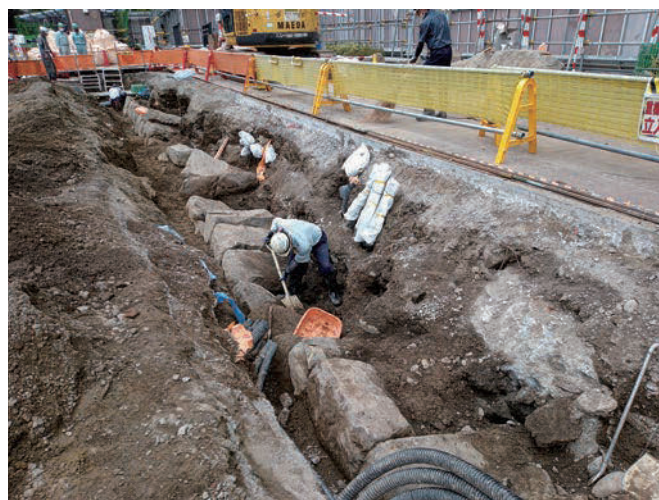
期間 令和6年1月16日（火）～3月17日（日）（予定）

場所 日比谷図書文化館 常設展V室（入場無料）

令和5年度下半期テーマ展は、令和4年（2022）8月22日から12月28日までに、千代田区大手町一丁目の神田橋川端緑道で行った神田橋門跡石垣発掘調査について紹介します。現在、区は発掘報告書を刊行するために整理作業と執筆を行っています。本記事では展示に先がけて、発掘調査で確認された神田橋門脇の江戸城外堀護岸を構成すると考えられる石垣や遺物について解説します。



【図1】調査地点



【写真1】石垣発掘調査の様子

神田橋門とは

神田橋門は江戸五口のひとつで、寛永6年（1629）に下野国真岡藩（現在の栃木県）の藩主・稲葉正勝^{まさかつ}によって築造されました。この場所は、将軍の菩提寺である上野寛永寺や日光東照宮に参詣する際の御成道の出発地点として知られています。また、日本橋川を挟んで対岸（北側）には、江戸城築城の資材を荷揚げする鎌倉河岸が存在していたため、水運においても重要な役割を持つ場所のひとつでした。現在でも、神田橋インターチェンジや日比谷通りに接続する交通の要所として知られています。

発掘調査の成果

発掘調査は神田橋門の東側（日本橋川右岸）約80㎡を行いました。当該地の石垣は、肥前国佐賀藩鍋島家によって築かれたものです。調査地南側の近世は、17世紀初頭～末葉までは信濃国松本藩水野家、17世紀末葉～18世紀初頭までは甲斐国甲府藩柳沢家、18世紀初頭～19世紀中葉までは出羽国庄内藩酒井家が屋敷を拝領しており、明治になると大蔵省印刷局が建てられました。



発掘調査の結果、江戸城外堀の一部と推定できる10段で構成された石垣が検出され、刻印の入った築石、排水の役割をもつ石樋【写真3】も認められました。石垣を構成する上段の背面は、従来の裏込め石などが山砂やモルタルに置き換わって



【写真2】5段目石垣調査中

いましたが、下段では築造期に近いものと考えられる背面構造が確認されました。石垣の刻印は、普請した鍋島家だけではなく、他家の刻印も混在していました。以上のことから、調査地の石垣は、普請後に何度か修理や積み直しを行っていたことが判明しました。

出土遺物としては近代の陶磁器やガラス製品、金属製品、近世の瓦、木製品などが出土し、全体的には、近現代の遺物で占められていました。この土地ならではの遺物としては、調査地南側の印刷局を示していると思われる「刷」や「局」を印字した陶磁器が、石垣の背面から出土しています。

また、石垣最底部からは、絵が刻印された大型の胴木が検出されました。絵が刻印された胴木は、区内での検出歴が少なく、出土状況から築造期に敷かれたものと考えられます。絵は確認できている種類でも、「」【写真4】、「」【写真5】、「六」【写真6】、「おもて」【写真7】などが胴木と胴木の継手付近で絵合わせになるように刻印された様子が確認できます。

現在、絵が刻印された胴木は、展示に向けてトレハロースを使用した保存処理作業を行っています。その作業の様子については、文化財ニュース 30号の文化財事務室通信に記載していますので、あわせてお読みください。


テーマ展では、これらの出土遺物の展示や、石垣の構造、胴木や石材を科学分析で調査した結果なども紹介する予定です。この機会に、今まで神田橋を通り過ぎるだけだった方にも、注目していただければ幸いです。

(学芸員 山田暁也)




【写真3】石垣検出写真



【写真4】胴木「」



【写真5】胴木「」



【写真6】胴木「六」



【写真7】胴木「おもて」

日比谷公園開園120周年—受け継がれる公園の機能—



絵はがき「大東京三十二景」日比谷公園

日比谷図書文化館が立地する都立日比谷公園は今年開園120周年を迎えます。また今年には公園制度の発足から150周年、前号でも触れた日比谷公園大音楽堂（野音）は建設から100周年、市政会館及び日比谷公会堂は今年3月に東京都指定有形文化財（建造物）に指定されるなど、記念となる年です。日本初の近代的西洋風公園である日比谷公園について、公園の機能に着目しながら当館の収藏品とともに紹介します。

近代の公園制度と公園の役割

明治6年（1873）、太政官布達第16号が発布され公園制度が発足しました。布達では都市地域の古くからの景勝地、旧跡、「群衆遊覧の場所」を「永く万人偕楽の地」として公園にすることが定められました。これにより東京では浅草、上野、芝、深川、飛鳥山の5公園の開園が決定しました。布達により開園した多くの公園は寺社の境内地を引き継ぐ、いわば江戸時代を継承する形で成立しましたが、日比谷公園はこれらとは異なる形で誕生しました。



着色絵はがき「大正四年十一月 御大典記念 日比谷公園ニヲケル全国菊花大会」

明治21年（1888）、東京を近代都市として整備するための都市計画法である東京市区改正条例が公布されました。そのなかで公園は、都市衛生や首都の壮観、非常事態時の避難地、市場、交通緩和などの機能を有する都市施設として位置付けられました。日比谷公園もこの時、東京を代表する中央公園として設置が決定し、紆余曲折を経て15年後の明治36年（1903）に開園しました。

開園後は東京市民憩いの場となり、「万人偕楽の地」、すなわち多くの人々が集い共に楽しむ場として種々のイベントが催されてきました。大正時代初頭に始まった菊花大会は現在まで100回近く続いています。また日露戦争の祝賀会や日比谷焼き討ち事件など、国家や民衆の意志の発露の場ともなりました。

日比谷公園と関東大震災

非常事態時の避難地としての機能は関東大震災で発揮されました。震災直後には被災した人々が大家として押し寄せ、その後は避難所として公設・私設のバラックが建ち並びました。一時期には6,000人もの人々が公園で暮らし、浴場や郵便局、商店もできるなど、さながら小都市の様相を呈していたといえます。野外音楽堂も慰安劇の上演や子供たちの臨時教室に使われました。のちに日比谷公園内に市政会館を建設する東京市政調査会は、被災した人々の避難場所の情報提供を公園内で行いました。

昭和4年(1929)には市政会館の竣工を記念して、震災以降初めてとなる大規模な帝都復興展覧会を同館で開催しました。この展覧会以降、大規模な復興祭や復興展覧会が催されていくことになります。翌年3月には「帝都復興完成祝賀会」が日比谷公園で行われました。

人々が集い共に楽しむ場として

昭和8年(1933)、「東京音頭」が発売されると瞬く間に大ヒットとなりました。この曲は震災からの復興や東京35区、いわゆる大東京の設立を記念するものとして人々に受容されただけでなく、全国的にも音頭ブームを巻き起こしました。発売から90年経った今なお盆踊りの定番曲やスポーツの応援歌として親しまれています。

実はこの曲、前年発売された「丸の内音頭」を改詞して発売されたものでした。丸の内音頭は丸の内、有楽町、日比谷界隈の飲食店店主達が、不景気の空気を吹き飛ばし、それまでなかった都会の音頭を作ろうと発案したものでした。地元の名所を詠み込んだこの曲は発売後すぐに人気となり、日比谷公園では初めて警察の許可を得た上で盆踊りが行われました。東京音頭はレコード会社がその人気に目を付け、登場する名所を東京全体に広げたもので、東京のみならず日本全国の盆踊りでかけられました。

平成15年(2003)には日比谷公園開園100周年を記念して「日比谷公園丸の内音頭大盆踊り大会」が開催され、コロナ禍の休止を挟みつつも現在まで続いています。

姿を変える日比谷公園

開園以来変わらないように見える日比谷公園も、戦後にはGHQによる接收を受けたり、昭和30年代には大噴水や地下駐車場が完成したりするなど、変化し続けてきました。しかし、平時やイベント時には人々が憩い、集い、東日本大震災でも多くの帰宅困難者を受け入れるなど、開園当初から現在まで公園の機能は受け継がれています。10年後を目標に進められている再整備後も、それは受け継がれていくでしょう。

(学芸員 岩城晴美)



『歴史写真 関東大震災大火記念号 第二巻』より 日比谷公園内のバラック



レコード「東京音頭」

こんなこともやっています～常盤橋屋外ミュージアム～

令和5年（2023）1月から行っていた国指定史跡常盤橋門跡を含む常盤橋公園の整備工事が5月31日をもって完了し、公園の一部エリアを開放しました。また、整備工事と同時に、常盤橋の修理工事で出た遺物や旧材などを透明な仮囲いの外から見られる常盤橋屋外ミュージアムも開園しました。

屋外ミュージアムでは、近世のアーチ橋を支えるための橋台石垣に関連する築石や根石などの遺物に加え、近代に入ってから架けられた石橋を構成する門柱石や親柱、手すりなどを展示しています。さらに、今回の整備工事では、夜間（18時から翌5時まで）になると、修復した石橋に加え、枡形石垣と屋外ミュージアムスペースで展示している遺物がライトアップされる仕組みも設けました【写真1】。今後は公園内の2か所に文化財サイン（説明板）を設置する予定です。

日中も夜間も楽しみながら学べる常盤橋屋外ミュージアムにぜひお立ち寄りください。
（学芸員 山田暁也）



【写真1】 屋外ミュージアムのライトアップ



都営地下鉄 ●三田線「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線
●日比谷線 } 「霞ヶ関駅」徒歩5分
●丸ノ内線

駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 10時～22時
土 10時～19時
日・祝 10時～17時

文化財事務局 月～金 10時～18時 文化財ホームページ

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
最新情報はホームページ等でご確認ください。

休館日 毎月第3月曜日

文化財ニュース 第31号 (3,000部)

発行日 令和5年8月31日

編集 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務局
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
<https://www.edo-chiyoda.jp>

発行 千代田区教育委員会

印刷 日本印刷株式会社

